

## 社説:総合型SC いきいき地域の拠点に

世代を問わず地域住民が継続的にスポーツを楽しむことを目的とした「総合型地域スポーツクラブ(SC)」の設立が県内で進んでいる。現在、19市町村で41クラブが活動しており、来年度末までに新たに5市町村に設立される予定だ。これにより県内25市町村のうち、24市町村に設立される見通しで、全国的にも先行した取り組みといえる。地域に密着するほど効果が期待できるだけに、いずれは旧市町村単位ごと、さらには中学校区単位ごとにクラブ数を増やしていきたい。

総合型地域SCは国のスポーツ振興計画によって、2001年から10年までの10年間で全国の市町村に少なくとも1クラブの設立が目標とされた。「誰でも、いつでも、好きなレベルで」をテーマに、市町村の体育協会や体育指導員が中心になって会員を募り、会費により運営や事業を行う自主組織だ。

生涯にわたってスポーツを楽しみ、健康や生きがいをづくりするとともに、世代の枠を超えたスポーツ交流、さらにはこれまでスポーツに触れる機会のなかった住民に参加を呼び掛けることなどもクラブが担う。過熱するスポーツ少年団、少子化で部員不足に陥っている中学校の部活動、体育協会の競技スポーツへの固執など、地域スポーツが抱える問題は少なくない。こうした問題の解決につながる可能性を秘めているだけに、設立の意義は小さくない。

県内で最初に発足したのは旧琴丘町(現三種町)。一度に15クラブが誕生し、現在は約6000人が登録して活動している。社会人ラグビーの秋田ノーザンブレッツ(秋田市)もクラブの1つ。各種大会に参戦しているほか、少年選手の指導やボランティア活動を通じて地域貢献も続けている。少年サッカーや野球チームを擁するエスポルチ秋田(同)はスポーツ活動だけでなく、子供たちを対象にした農業体験教室を開くなど、会員やボランティア住民によるプログラムを実践している。

それぞれのクラブは成り立ちや運営方針に特徴があり、地域事情に応じて性格も異なる。発足時は型にはまらず、無理なくスタートさせるのが活動の継続につながるだろう。

昨年の秋田わか杉国体を契機に県内のスポーツ熱、健康づくりは高まりを見せている。県も「健康づくり日本一」を目指した施策に本腰を入れており、クラブはこうした面でも受け皿になる。特にこれまでスポーツに縁のなかった人たちにこそ目を向け、「遊び」中心から次第に運動習慣を身に付けるように促すべきだろう。地域住民が多世代にわたってさまざまなスポーツに取り組む様子は、ほほ笑ましく、明るく生き生きした雰囲気だ。住民同士のきずなも深まり、地域づくりの担い手集団にもなり得るのではないかな。

ただ、課題もまた多い。市町村教委と地域体協などの連携をどう図るか。教委の予算不足、体協の行政依存の克服が鍵となる。また、地域のスポーツリーダーの発掘・活用などもさほど進んでいないのが現状だ。クラブの設立を支援している県体協の指導の下、関係者には一層の取り組みを期待したい。